

# 多義動詞の第一言語習得に関する認知論的考察

## ——知覚動詞 see を例に——\*

北原賢一

### 1. はじめに

子供が多義語をどのように習得するのかという問題は、理論言語学者にとって興味深い問題である。とりわけ、認知言語学者にとっては、理論的礎として認知能力に重きを置くだけに、実際に子供がどのような認知能力を用いて多義語の習得を達成するか、という問題と言い換えられるだろう。本論文の目的は、1) 英語の知覚動詞 *see* の基本義である視覚的意味 (*I looked and looked, but I couldn't see it.*) が、因果関係のメトニミーに基づいて、認識的意味 (*I see what you're saying.*) へと拡張することを論じた上で、2) 第一言語習得の段階で、メトニミーが抽象的な意味の習得に積極的に関わっていることを明らかにすることである。

---

\* 本論文は、2004年に筑波英語学会談話会で行った研究発表に加筆・修正を加えたものである。第一言語習得の分析は、筆者が大学の卒業研究として選んだテーマと密接に関わっていた。世界最大規模の幼児の発話データの集積である CHILDES (Child Language Data Exchange System) の存在がなければ、研究発表はもとより、この小論も完成しなかった。当時大学生だった私に CHILDES の使用方法についてご教示をくださった京都産業大学の石井丈夫先生、愛知淑徳大学の宮田 Susanne 先生には、心より御礼申し上げたい。また、中英語期の言語データについてご教示をくださった麗澤大学同僚の中道嘉彦先生に心より感謝を申し上げます。

## 2. 知覚動詞 *see* とメタファー

英語の知覚動詞 *see* には、次のように視覚を表す意味と認識を表す意味がある。事例は、Collins Cobuild Advanced Dictionary 第3版からの例である。(1) は視覚に関わる意味で用いられているのに対し、(2) は視覚の意味は存在せず、「知る」、「わかる」の意味でしか用いられていない。

- (1)
  - a. You can't *see* colors at night.
  - b. It is dark; I cannot *see*.
  - c. On a clear day we can *see* miles and miles from this hill-top.
  - d. Something is wrong with my eyes. I'm *seeing* double.
  - e. I looked and looked, but I couldn't *see* it.
  - f. I have never *seen* a butterfly like that before.
- (2)
  - a. Oh, I *see* what you're saying.
  - b. Now do you *see*?
  - c. "Do you *see* what I mean?" "yes: now I *see*."
  - d. Nothing is so bad as somebody who cannot *see* the joke.
  - e. I don't *see* why you are so mean to us.
  - f. I *see* what you mean, but ...

動詞 *see* に見られるこのような多義性は、単に恣意的であるわけではない。Sweetser (1990) などの研究から明らかにされてきたように、人間言語一般に、視知覚を表す動詞が「知る」や「わかる」といった意味を通時的にも共時的にも持ちえてきた事実は、人間の認知処理における視覚の優位性を反映したものであると考えられる。したがって、(1) と (2) に見られるような動詞の多義性には、何らかの認知基盤があると考えるほうが、人間言語に広く見られる普遍的な言語事実をより正確に捉えられると考えられる。

では、動詞の意味拡張には、どのような認知基盤があるのだろうか。認知的アプローチによる動詞の意味拡張の分析では、メタファーを用いた分析が一般的である (Lakoff and Johnson 1980, 1999, Lakoff 1987, 1993)。メタファーとは、たとえば次のようなものである。

(3) ARGUMENT IS WAR

- a. Your claims are *indefensible*.
- b. He *attacked every weak point* in my argument.
- c. His criticism were *right on target*.
- d. I *demolished* his argument.
- e. I've never *won* an argument with him.
- f. You disagree? Okay, *shoot!*
- g. If you use that strategy, he'll *wipe you out*.
- h. He *shot down* all of my argument.

(Lakoff and Johnson 1980: 4)

(3)の例に見るように、異なった概念同士をある種の類似性 (Langacker 2000) によって写像するのがメタファーの働きである。ここでは、戦争という具体的かつ身体的な経験を用いて、議論という抽象的な物事を捉えている。その際、「議論」は目標領域 (target domain) となり、「戦争」を根源領域 (source domain) として、両領域間で概念上の写像が行われる。「戦争」でイメージされるような言語表現が、「議論」を表現する際に用いることができるのは、このメタファーの働きによると考えられる。言わば、「議論」を「戦争」に関する語彙を用いて構造化している」ということになる。

「知ること (わかること)」と「見ること」の関係についても、同じように次のようなメタファーが仮定される。

(4) KNOWING IS SEEING

- a. Can you *shed more light* on this issue?
- b. He *spotlighted* the issues that were important.
- c. She finally *opened her eyes* to what was going on around her.
- d. I *was in the dark* for a long time.
- e. My early training had *put blinders* on me.
- f. I'm *just in a fog* today. I don't know what is going on.
- g. She walked around *blindfolded*.
- h. *His eyes are closed* to everything around him.

- i. He has eyes in the back on his head.

(Conceptual Metaphor Home Page: <http://cogsci.berkeley.edu/>)

(4) に見るように、視覚経験に関連する言語表現を用いて、「知ること」を表わすことが可能である。多くの認知言語学者は、このようなメタファーを多義語の分析にも応用している (Lakoff and Johnson 1999, Kövecses 2002)。しかし、多義動詞の意味拡張は、メタファーとは言いがたい意味拡張をすることがある。Johnson (1997) は、次の (5) の例における *see* が「見る」なのか「知る」なのかが非常にあいまいであると指摘している。また、(6) の例は、「見て知る」という意味で用いられる *see* の例である。

- (5) a. Can you *see* what's in here? (Showing a boy the little window on a tape-recorder.)  
b. Oh, I *see* what you wanted. (In the response to a boy's request to go get a toy.)  
c. Now you push that and *see* what happens.  
e. Oh, I *see* where you wanna go. Okay. (A boy is looking out the window at a little balcony opposite.)  
f. Oh, maybe I have some pennies we can put in and *see* how it works.  
g. Let's turn the page and *see* what happens.  
h. Oh, let's *see* who's there.

(Johnson 1997: 164)

- (6) a. I *see* the accident in today's paper.  
b. We *saw* it in the paper that the candidate was defeated in the local election. (ジーニアス英和辞典第3版)  
c. I *saw* that the riot had been suppressed.

(リーダーズ英和辞典第2版)

小西友七の『英語基本動詞辞典』では、知覚動詞 *see* が *wh* 語句や *that* 節を目的語にとった場合に「見て知る」のような意味が生まれてしまうのは、身体的知覚と精神的知覚が連続した因果関係「知覚することで認識する」という

関係があるからだと説明している。このことから異なった概念同士をある種の類似性によって写像すると考えるメタファー理論では、知覚動詞 *see* の多義性を説明できたことにはならない。類似性と連続性を同一視してしまうことは、認知能力を言語分析の手段として用いる理論に混乱を生じさせかねないからである。

### 3. メトニミーの偏在

知覚経験と認識の連続的な因果関係に基づく意味拡張の背後には、メトニミーの働きがある (Goosens 1990)。メトニミーは、人間や事物を直接指示する代わりに、それに概念的に近接する別の事物を使って指示するという言語現象である。

- (7) a. He plays *the piano* well.  
 b. *The street* was clean swept.  
 c. They lost *a match* to us yesterday.  
 d. I will make a reference to *that book*.  
 e. As for this case, I obeyed *him*.
- (8) a. He plays (strikes) the keys of a piano.  
 b. The dust in the street was clean swept.  
 c. They lost a match on score to us yesterday.  
 d. I will make a reference to the writer's name, title, or sentences in that book.  
 e. As for this case, I obeyed his opinion.

(7) の例は、実質 (8) のように言い換えることができる。Taylor (1995) はメトニミーによる動機付け理論をさらに拡大し、「ある言語表現の多様な使用のために、単一のフレーム (語と結び付いた背景的世界知識) が喚起された時、そのフレーム内でのプロファイル・シフト (焦点の移動) がその使用を動機付けている」と述べている。続く (9) の例は、それぞれ動作行為に焦点がある場合 ((a)) と、動作行為を全体的にとらえることによる静的な結果状態に焦点がある場合 ((b)) の前置詞の用法の対比である。それぞれの文例の動詞によって、前置詞が持つ意味フレーム内のどこに焦点が置かれるのかが決ま

っている。

- (9)
- a. The airplane flew *over* the United States.
  - b. The airplane hovered *over* the United States.
  - c. My brother came *out of* the prison.
  - d. My brother is now *out of* the prison.
  - e. She walked *across* the street.
  - f. She lives *across* the street.
  - g. Sam drove *by* his bank.
  - h. Sam lives *by* the bank.

(Taylor 1995: 127-130)

(9c) と (9d) の例を比べてみよう。同じ *out of* が使われてはいるが、表している意味は微妙に異なる。前者では、刑務所から出てくるという動作行為が表されているのに対し、後者では刑務所から出所してシャバにいるという静的な結果状態が表されている。動詞との組み合わせに応じて、前置詞が表す意味も変わるのである。

また、動詞の場合も、動作行為に焦点がある場合、動作行為の持続がもたらす結果状態に焦点をおく場合に分かれる例が無数にある。

- (10)
- a. Jack *kicked* Emily.
  - b. Jack *kicked* Emily for a half an hour.
  - c. We *walked* in our town.
  - d. We *walked* to school.
  - e. I *washed* my car.
  - f. I *washed* the mud off the car.
  - g. My uncle *dried* fish on a towel.
  - h. My uncle *dried* fish.

(Taylor 1995: 127-130)

動詞 *dry* を例にとれば、「タオルで乾かす」という動作行為 ((10g)) だけでなく、「乾燥させた」という動作行為の結果 ((10h)) の両方を表すことができる。

以上のように、メトニミー的意味拡張の事例を指摘すれば、枚挙にいとまがないほどである。

さらに Taylor は、これまでメタファーと考えられてきたものにも、メトニミーによる動機付けが考えられると主張する。

(11) HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

- a. That *boosted* everyone's spirits.
- b. Our spirits *rose*.
- c. I'm feeling *down*.

(Lakoff and Johnson 1980: 15)

(12) CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN

- a. Wake *up*.
- b. The woman *rises* early in the morning.
- c. She *fell* asleep

(Lakoff and Johnson 1980: 15)

(13) MORE IS UP; LESS IS DOWN

- a. The number of errors kept *going up*.
- b. Our income *rose* last year.
- c. Their income *fell* this year.

(Lakoff and Johnson 1980: 15-16)

レイコフ流のメタファー論を展開するならば、感情や意識などは、上と下という空間的な概念によって写像されることで具体化されるということになる。しかし、Taylor によれば、感情・意識と空間関係にはある種の因果関係があるという。幸福感を感じていれば自ら人間の体は起き上がり、悲しみに沈むときは頭や体はうなだれて下がる。意識が目覚めれば体は起き上がり、意識が無くなれば倒れこむ。物を重ねれば高さが増し、物を減らせば低くなる。喜怒哀楽の感情とそれによって引き起こされる身体的な動作、空間上の変化との連続的な因果関係が、これらの表現の基盤となっていると考えることはおかしいことではない。

従来メタファーとして考えられてきたものに因果関係のメトニミーの動機付けがあることは、メトニミーが私たちの言語使用、意味拡張、言語習得に

において根幹にあることを予感させる。このことから、「見ることによって知る（わかる）」という因果関係のメトニミーが、動詞 see の意味拡張を動機付けていると考えることは理にかなうものである。「知覚行為とそれによる結果」というメトニミーから、他の知覚を表す動詞の分析も可能となるからである。

- (14) a. *Feel* if I have a fever.  
b. I *feel* that he was a good doctor.
- (15) a. I was pleased to *hear* the news.  
b. I *hear* what you say but I never agree with you.
- (16) a. She didn't *notice* him entering the room.  
b. They *noticed* that you told a big lie.
- (17) a. I *grasped* the rope so as not to fall.  
b. I *grasped* that the rope can never fall.
- (18) a. She's *smelling* the milk to see if it is sour.  
b. They *smelled* out the plot.
- (19) a. That *sounds* like a train.  
b. He didn't *sound* in high spirits.
- (20) a. She's *tasting* the cake to see if it is sweet enough.  
b. He has not *tasted* food for days.

(15a) の *hear* は「知らせを耳にする」という動作行為に焦点があるのに対し、(15b) の *hear* は「相手の言っていることを聞いて理解はする」が、同意はできない、というように「認識」の意味に転じている。嗅覚を表す *smell* も同じで、(18b) の「嗅ぎ付ける」にはもはや嗅覚の意味はなく、計画の存在を「認識」しているのである。五感の全てに同じことが言えるわけではなく、*taste* には「口にして味わう」から「食べる」という意味の拡張しかない。

最初は身体的な知覚行為の意味を表していたと推察されるこれらの動詞は、やがて結果状態を含蓄するようになり、その後には事態把握の意味でも用いられるようになったと考えられる。メタファーによる分析のみを用いればそれぞれの知覚に対してメタファーを設定しなければならず（「聞くことは理解すること」、「つかむことは理解すること」など）、非経済的である。「知覚することは認識すること」という総称的なメタファーをたてて、それぞれを下位



分類しようとしても、*taste* のみ「認識」の意味を持たないため、知覚動詞の意味拡張の一般性を引き出すことができない。*taste* は認識を表す意味こそ持たないが、これも因果関係のメトニミーとして見れば、「味を見ること」が知覚であり「食べること」がその結果であると考えられる。つまり、上に見た知覚動詞の多義性は「知覚行為とその結果」というメトニミーによって説明できるのである。したがって、知覚動詞のこれらの意味拡張には、メトニミーの動機付けがあると主張することが妥当だと考えられる。

(4)に見られたような KNOWING IS SEEING の表現は、ある概念を別の概念領域の語彙を用いて表しているという点では、比喩性が感じられるためにメタファーと考えられるが、一方で多義動詞の振る舞い方はメトニミー的であり、Rumelhart (1993) が指摘するように、言語習得上メトニミーよりもメタファーが高度な言語使用であることを考えれば、(4)を仮にメタファーと考えたとしても、背後にはメトニミーが隠れていることを指摘できるだろう。

#### 4. 第一言語習得におけるメトニミーの役割

第一言語習得の研究からも、これまでの議論を支持する証拠がある。子供が知覚動詞 *see* の「知る」という意味を習得する際の観察である。子供は (5), (6) で見られたような *wh* 句や *that* 節を伴ったあいまいな意味の *see* を集中的に使う時期があり、Johnson (1997) はこれを *conflation* と呼んでいる。子供は、ある時期、大人による (5), (6) のような発話を手がかりとして、本来「わかる」という意味として習得すべき *see* を「見る+わかる」として融合して認識する。その後、視覚的な意味を切り離して抽象的な意味である「わかる」を習得する。<sup>1</sup>

(21) MOT: Yeah, she went for a walk in her bed. That's really funny.

SHE: I wanna *see* how...*see* how walk.

INV: I wanna see how she walked?

(...)

SHE: Yeah.

<sup>1</sup> MOT, FAT, INV は子供の父母を含む大人の発話であり、SHE はデータ収集の対象となった子供 Shem を指している。

- (22) INV: Yeah. Remembered just what buttons to push.  
(...)  
SHE: This one, mommy. (...) Turn on and *see* how works.  
INV: yep.  
SHE: That.  
INV: What? This is the speaker.
- (23) INV: What do you think he's gonna find to do?  
SHE: You turn the page and *see* what he's doing.
- (24) SHE: I'm going and *see* what's the trouble.  
INV: Where are you going to see what's the trouble?  
SHE: Inside.
- (25) MOT: Hurry up!  
CHI: (...) *See* what I done to these.
- (26) FAT: She's got lots of them.  
CHI: *See* how it is.
- (27) MOT: (...) get down.  
CHI: I wanna *see* how you put the fire on.
- (28) MOT: Well, you're supposed to keep it in a line.  
CHI: *See* who wins.

(Clark Corpus)

上述の例で、子供は「確かめる」とか「見ることで知る」といった、視覚的意味を切り離さない意味の *see* を使っていると Johnson は指摘している。Johnson は、子供が *see* の「見る」と「わかる」を融合的に習得し、最終的に両者の意味概念を切り離すという過程が、今まで議論されなかったメタファーの新しい働きであると主張している。しかし今まで見てきたように、この関係をメトニミーとして考えることで無用な概念メタファーを立てる必要性もなく、メタファーの働きに新しい定義をする理論的な負担もなくすることができる。だが、子供が「見る+わかる」を一つのフレームとしてとらえているか否かは、両者の概念「見る」と「わかる」を事前に習得している必要があるだろう。そのことを踏まえた上で子供の言語習得過程を観察してみたい。利用するコーパスは CHILDES に集積された子供の発話データのコーパスである

(MacWhinney 1995)。<sup>2</sup>

Adam: 3;4.1

(29) MOT: What did he say?

CHI: I told (...) do you *understand*?

Adam: 3;4.18

(30) ... and *see* how it goes.

(31) *See* what happens? Huh? *You see*? This is a microscope.

Adam: 3;5.0

(32) CHI: Paul didn't laugh.

MOT: He doesn't understand. He is too little to understand.

CHI: Do you *understand*, Paul? Does president Kennedy shot a new president Kennedy? Paul *understand*. Does Paul *understand* Santa Claus?

(33) *See* what I did?

Adam: 3;6.9

(34) MOT: H'm?

CHI: Where these go? I can't find them. *See* what I got in my hand?

(35) CHI: *See*? *See* how I write?

MOT: Um h'm.

CHI: I can write very slowly. I write (...) *see*?

(36) *See* how it goes.

Adam: 3;7.7

(37) This one and *see* what happens.

(38) Let's do the other one and *see* what happen.

Adam: 3;8.14

(39) I better *see* what was this.

Adam: 3;10.15

(40) CHI: *See* how it drive it. Now you drive. *See*? It's bump.

MOT: Careful, Adam. You don't want it to break it.

---

<sup>2</sup> Adam の隣に表記された数字は、Adam の年齢を示している。MOT は母であり、CHI は Child、つまり Adam のことである。

- (41) MOT: Go backwards and *see* what happens.  
CHI: *See*? Nothing happens. *See* what happens? Boom. Boom.
- (42) MOT: You might have that for Robin. Don't you think Robin needs a kite?  
CHI: Mommy, ( ...) *see* how it flies.

Adam: 3;11.0

- (43) MOT: Yes, I suppose so.  
CHI: Where? We having fun.  
MOT: We're having fun?  
CHI: I can't *see* which one we doing.

Adam: 3;11.14

- (44) MOT: Oh, the lion jumped through the fire hoop?  
CHI: ( ...) Mommy, *see* what I *see*?

Adam: 4;3.9

- (45) See, Mommy. *See* what my horse told me to do?

(Brown Corpus)

(29) の初期段階で、動詞 *understand* を用いていることに着目されたい。その後、あいまいな *see* の使用が続き、純粹に視覚的意味を切り離れた *see* を使っている例を (45) で見ることができる。

以上のことから、子供は *see* の習得において、最初に視覚的意味を習得し、その後視覚的意味と「理解する」という意味が融合したフレームを作り上げ、最終的にどちらかに焦点を置いて言語使用を行うような大人の言語使用に到達するのだと考えられる。

## 5. 通時的視点による「見る」から「わかる」への意味拡張

Radden (2000) は、KNOWING IS SEEING は二つの出来事を同時性によって一つの出来事にブレンドしたものだとして主張している。Radden によれば、古英語 *witan* 'know' は、印欧語 \**weid-* 'see' を語源とし、ラテン語の完了形 *vidi* 'I have seen,' から派生されたものであり、談話上 'I know' という意味を連想させるものであったことを指摘している。つまり、Radden は、語用論的な推測が現在の *see* の「わかる」を生んだと指摘しているのである。Oxford English

*Dictionary* には the verb *see* “with mixed literal and figurative sense: to perceive by visual tokens.” という説明がある。興味深いことに、the verb *see* with mixed literal and figurative meaning の例文は、最古のものとして 1200 年のものが挙げられており、純粹な「わかる」の意味の例文も同様に 1200 年の例文から始まっている。このことは歴史的意味変化の過程でも *conflation* があつたことを示唆している。(46), (47) の例は OED からの例である。

- (46) c1200 ORMIN 2930 He sahh þatt 3ho wiþþ childe was, & nisste he nohht whæroffe.
- (47) c1200 ORMIN 13590 (Cumm.. to sen þin Godd Wiþþ erþli3 bodi3sihhþe,) Whamm þu þurh Drihhtin sest nu33u Wiþþ innsiht off þin herre.

ORMIN とは、Ormulum (『オームの書』) を指す。内容は福音書、聖者伝などの解説である (46) の例文は、He saw that she was with child, but he didn't know who the father was. といった内容で、He は聖母マリアと婚約していたヨセフ、she はマリアを指すと思われる。婚約者マリアの貞操を疑った場面であり、マリアが処女懐胎したことによって膨らむ腹を、「目で見て認識した」のである。(47) の例文を逐語訳すれば、Come .. to see thy God with earthly bodysight, whom thou through Lord seest now with insight of thy heart. となり、whom は受肉した God、つまり Jesus を指しており、see は「心眼で見る」で、もはや視覚で「見て」はいないことに着目されたい。<sup>3</sup>

## 6. 日本語の場合

知覚動詞の意味拡張をメトニミーとして分析することにより、さらに、日本語の知覚動詞も関連づけて説明することができる。次の (48), (49) は日本語の知覚動詞「見る」と「見える」の例である。

- (48) a. 新聞を見る。  
b. 野球を観る。

<sup>3</sup> 麗澤大学同僚の中道嘉彦先生の御教示による。

- c. 医者が患者を診る。
  - d. 息子の勉強を看る。
  - e. 君の言うことを\*見る/わかる。
- (49)
- a. 昼間に富士山がはっきりと見える。
  - b. 眼がすっきりと見えるようになる。
  - c. 愛嬌がなく、素っ気のない人と見える。
  - d. その危険を十分に理解していると見えるが、それでもあえて、開放への道を歩むのか否か。 (読売年鑑 2000)
  - e. 君の言うことが?見える/わかる。

「見る」は、視覚行為に焦点をおく動詞であるという点で、英語の look at に近似している。一方、see に対応するのは、「見える」である。これは、知覚動詞 see が進行時制をとらない状態動詞であるという点から、同じく状態に焦点をおく「見える」と共通性があるからである。状態動詞のような非定形の動詞は時制に関わらず、事態の全体を表すということが一般に認められている。

- (50)
- a. I saw him walking across the square.
  - b. I saw him walk across the square.

(Duffley 2003)

see が look at と違い、「わかる」という認識の意味を持ちえたことは、see が動作行為に焦点を置かない状態動詞であることと関連すると思われる。(49c), (49d) では「見える」が補文標識「と」との接続で、認識的な意味を持つことがわかるが、(48e), (49e) のように、直接的に「わかる」を表すことはできない。「君の言わんとしていることがようやく見えてきた」のようにガ格を伴って文脈情報などから迂言的にしか表すことができないことは、英語とは対照的である。その原因は、英語が結果を重視する言語であり、日本語が行為を重視する言語である (影山 2002) ということに結びつけられるかもしれない。

また、「みる」が補助動詞として使われると、行為のとっかかりを表すという点も、日本語の行為重視性と関連すると考えられる。

- (51) a. 腐った野菜を食べてみる。  
b. テレビを齧ってみる。  
c. 新学期は、新しいことをやってみる。  
d. ちょっと見てみる。  
e. あれを試してみる。

興味深いことに、「見る」の第一言語習得の段階で、補助動詞「みる」は融合的に獲得される。

- (52) CHI: Mama mo?  
RMO: Kore Onechan-no. ***Ake-te-miru?***  
CHI: ***Miru!***
- (53) RMO: Taore-te-ru.  
CHI: Mama ***miru?***  
RMO: Un (...).  
CHI: Deki-nai. Mama wa deki-nai.

(Miyata Corpus)

本来テ形接続によって表すべき「V てみる」が、本動詞として用いられていることに着目されたい。

## 7. おわりに

これまでの議論から、次のようなことが言える。1) 知覚動詞 *see* における「見る」から「わかる」の意味拡張にはメトニミー基盤があること、2) 概念メタファーをメトニミーが動機付ける可能性があるということ、3) 日英語の知覚動詞は、人間の一般的な認知能力を反映する一方で、言語自体が持つ傾向をも反映する、すなわち、普遍性と相対性を観察できる、ということである。今後は、様々な多義語の意味拡張についても、CHILDES コーパスを調べて検証してみたい。

## 参考文献

- Goossens, L. 1990. "Metaphonymy: the interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action." In *Cognitive Linguistics* 1: pp.323-340.
- Johnson, C. 1997. "Metaphor vs. conflation in the acquisition of polysemy: the case of SEE." In M. K. Hiraga, C.Sinha and S. Wilcox, eds., 1999. *Cultural, Typological and Psychological Issues in Cognitive Linguistics*. Current Issues in Linguistic Theory 152, pp.155-169. Amsterdam: John Benjamins.
- 影山太郎. 2002. 『ケジメのない日本語』, 岩波書店.
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago.
- Lakoff, G. 1993. "The contemporary theory of metaphor." In A. Ortony, ed., 1993. *Metaphor and Thought*. Second edition. pp.202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphor We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. Basic Books, A Member of the Perseus Books Group.
- Langacker, R. 2002. "A dynamic usage-based model." In Barlow, M. and Kemmer, S. eds., *Usage Based Models of Language*. CSLI Publications.
- MacWhinney, B. 1995. *The CHILDES Project: Tool For Analyzing Talk*. Third Edition. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Radden, G. 2000. "How metonymic are metaphors?" In Barcelona, Antonio, ed., 2000. *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: A Cognitive Perspective*. pp.93-108. Mouton de Gruyter.
- Rumelhart, D. E. 1993. "Some problems with the notion of literal meanings." In A. Ortony, ed., 1993. *Metaphor and Thought*. Second edition. pp.202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, J. R. 1995. *Linguistic Categorization*. Second Edition. Third Edition 2003.